

twitterで怪談2010



short story1 「夜の住宅街」

コツコツ.....ヒタタ——コツ.....（嫌だ、誰か着いて来るの？）都内某所の住宅街は夜ともなれば、静まり返る（どうしよう.....）立ち止まっていた女が、走り出す！ハアハア「もう大丈夫よね？」振り向いたその瞬間、刹那！！キャアアアアア

short story2 「午前四時」

カッ……「な、に？」カッ、カッ「鈴の音？」カッ。カッ。午前四時、この時刻の意味をご存知ですか？「お、音が段々大きく、な、る」ゴクリ。私の喉が鳴る。部屋には靄（もや）が立ち込め「あ、有り得ないわ！」アアアアア……さあ、あの扉の向こうには『アアア』

short story3 「貴方へ」

「あら、おかえりなさい」ツルルル「貴方、電話に出て」『チッ、また悪戯電話か!』「フフ、怒らないで」「今日のお食事は美味しい?」「やだ、食事中に電気を消さないで」「あら、お風呂なの?ウフフ」「ねえ.....貴方を見ているわ」ミル.....コカラ.....ズット

short story4「影」

『貴方は、知っていますか？気付いて……いる？』『……アツモノカゲハナタノデスカ？』『疲れた』と、男が公園のベンチに座る。夏の日差しの中。外周りの営業はきつい……「え?!おい!ちょっと待てよ!」「俺の影……」

short story5 「カーブミラー」

鏡に纏わる（まつわる）怖い話は色々ありますが、知ってますか？以外にカーブミラーの話が多いことを……「ねえ、また例のカーブミラー合わせ鏡になってたんだって？」「え？行って見ようよお」そして「あ、見ちゃ駄目えー」キャアアアア！！

short story6 「雨と幽霊」

「今日も雨か」ザー——窓から外を見ると雨足が強まったみたいだった。ピチャンピチャン「ん？」
雨音に混じり聞きなれない音がする。ピチャンピチャン。そこには「！」髪の長い女が「濡れてない
？ゆ、幽霊」アアアアアア

short story7 「キョウキ」

『白過ぎる朝日に狂気を感じたことはありませんか？』『赤過ぎる夕日に凶器を感じたことはありませんか？』『青く澄んだ月明りに狂喜を感じたことは……ありませんか？』それらはきっと……あなたの知らないキョウキが巣食う場所です。

short story8 「電話」

『待って下さい。その電話に出るのですか？』『出てもよいのです……か』貴方の背後の照明が赤、チラチラしていますよ？電話のディスプレイが赤、チカチカしていますよ？「もしもし」ザーンッ！アァア〜ウゥウ……！

short story9 「犬と……」

ワンワン「もう！隣の馬鹿犬！どうして、毎朝五時に吠えるの」ワンワン！ウゥ……ワンワン！ウー『おや？貴方が聞こえてる鳴き声は犬だけですか、本当に？』『今日こそ文句言ってやる！』私はカーテンを開け……キャアアア

short story10 「隣人」

ヒゴㇰ、ヒゴㇰ.....私の部屋の壁から聞こえるようになった声。それは毎晩、繰り返され。ある日から在り得ない騒音が隣から頻繁にするようになった。最近見た住人は、コヨモデハイというくらい、やつれていた。

short story11 「におい」

匂いや臭い……『貴方は、においを嗅ぎ分けていますか？』「何を馬鹿な！においくらい判る」『本当に？私の言ってるのは、肉や魂のにおいですよ？』ワカッテスか？それらが判る貴方は…
…モ、コチガワジ ユウニデス。

short story12 「水と罪人」

時として水は、罪人と深く関わっているようです『異常な程、洗う人が周りに居ませんか？』洗った洗濯物や食器を何度も洗う。手をやたらと洗いたがる。拭き掃除をすると周りがぬれたまま……罪人は何ヲ洗ッテイルンデショウネ？

short story13 「彼女」

「彼女が瞬きをした」「それに魅入られた僕は恋をした」薄明かりの下、差し込む月明かりに僕の理性が野生に変わりそうだ。君に触れようか.....彼女の頬に紅が刺す。動けない僕は今日も佇む。デテオデキミ.....絵ノカイラ.....

short story14 「ムシノリセ？」

ムシノリセ？私はそう思って立ち止まった。青信号、渡らなければ……足が進まない「あっ！！」信号無視の車が突っ込んで来た！助かったと思ったら……後続車も突っ込み、立ち止まっていた私は巻き込まれた。コレがムシノリセ？

short story15 「闇の色」

闇の色は、実は何種類もあるのはご存知ですか？フッと私は気付いたのです。路地を曲がった瞬間見る闇色。視線が気になり見詰めてしまった闇色。それは全部違いました。最近では、私の眼は闇色になりました『ええ、闇しか見えません』

short story16 「餓鬼（がき）」

最近、餓鬼（がき）が人に生まれ変わっているのを見ます。肉体が魂を持つので無く、餓鬼を魂の代わりに持ち生まれます。相変わらず、餓鬼たちは現世を貪り（むさぼり）喰います『嗚呼、何て事でしょう！』この世のどこに穴でも開いているんですかね？

short story17 「歌声」

夜の住宅街に彷徨い（さまよい）出た。時計は午前2時を指す。美しい歌声の主を求め今日こそは……ミツタ。私が見た先には、血塗れ（ちまみれ）の女が窓に張り付く様（よう）に立って居た。その先には、狂った様（よう）にピアノを弾く男が……ワツミイラ、刹那！

short story18 「裏切りは許せない！」

(キャアアアア)心の底から叫びたい！けれど、私には舌が無い。私が殺したあの男に取られた。何度もあの男を刺した。裏切りは許せない！「ハッ！夢か……」彼は浮気をしている、私の友人と。いつか……夢のように私は彼を……

short story19 「鴉—1」

闇夜に優雅に舞う鴉。今宵は何を見つけたのでしょうか。死臭？それとも血の臭い。もしや肉や魂の腐敗する臭いでも嗅ぎ付けましたか？嗚呼、今宵は……抜け目の無い奴等は扉の匂い嗅ぎ付けたのやもしれません。さて……侍マシヨカ？

short story20 「幽霊—1」

「俺は幽霊を飼っている」「そいつは窓辺に佇み（たたずみ）、景色ではなく俺をただ見ている」白い着物に淡い紫の花の付いた帯を結び、透けた白いうなじが綺麗だった「お前、俺が殺した女じゃないよな？」ニヤッと笑う。マ、セキヲクレテヤ。

short story21 「椿—1」

越した先の家には椿の木があった。俺は何気なく見る。椿の花が震えた。可憐（かれん）さに……俺は目が離せない。魅かれる。ホ°列°列、花弁より赤い雫が落ちた。足元を見ると女の長い黒髪が土から這い出るように椿の根元に絡んでいた。

short story22 「鏡—1」

僕の愛しい君は鏡の中「フッ、ナルシスト？違うよ」ある儀式を行ない鏡の中に招いたのさ。君の為に逃えた（あつらえた）鏡、素敵でしょ？特別な夜は君をエスコートするよ。ドレスも用意しよう、シンデレラの靴も必要かい？フッフッ、ハサナイ.....

short story23 「空」

空の音を聞いたことがありますか？貴方が人ならば聞いてはいけません。人が聞いて良い音は稲妻と決まっています。それ以外の音は.....人ではない者の領域の音です。聞いてしまった貴方.....何かが、外ヅモシマセン？

short story24 「薬指の指輪」

貴方が居なくなったから薬指の指輪を公園の湖に投げ入れた。夜.....闇に煌々（こうこう）と輝く満月の様（さま）にワイン共に酔い痴れる（しれる）。いつしか聞き慣れた足音が響き、振り向く前に私は拘束され、揺らめく。愛撫された左手の薬指には指輪が戻っていた。

short story25 「不老不死の少女—1」

時が支配する世界「建物は朽ちる」「人間が朽ちる肉に見える」少女が言う。私は「老人の様（よう）な事を言うね」と少女に返す「少なくとも貴方の三倍は生きてるわ」「時の支配が無いのだから見方が違うわ」深遠の瞳が私に語る。深く深く……

short story26 「自殺の名所」

大通りの交差点は自殺の名所だ。死を喰らかの様（よう）に毎日毎日、死ぬ。決まり事の様（よう）に15メートル程先の踏切りに始発が汽笛を鳴す時刻に……俺は見たんだ！有り得ない数の異様な透けた人の群れを！奴等か……キッ、ガレレキ。

short story27 「闇—1」

夜の闇に紛れようとしている貴方の殺意『ククッ、尻尾（しっぽ）が出てますよ？』あんまり殺意を見せびらかすと『ホラ、寄って来る』餌の匂いに這い出して来た魑魅魍魎（ちみもうりょう）が.....『さて、貴方が獲物に在り付くか』アッがエエニカカ.....

short story28 「鏡—2」

私の家では、代々女にのみ受け継がれる鏡がある。その鏡を受け継いだ女は美しくなり幸福に成れると言う。ただ……受け継いだ女が美貌を損ない鏡に映ると鏡が血を流すそうだ。鏡が血を流した後は……口には出せない結末が待つと言う。

short story29 「娘の友達」

古い家を相続した。その家の庭で娘が毬（まり）代わりに頭をついていた。子供の頭だった。キャアアア！叫んだ私を見る娘の目が怯える（おびえる）。娘は大事そうに毬代わりの頭を胸に抱きかかえ「だってママ。初めて出来たお友達が頭だけだったんだもん」

short story30 「夕がイヤトリギニ」

桜の化身（けしん）と恋をする乙女。生気を吸われ、桜の花の香りに身を任す。変化してしまった肉体……「ねえ桜あ」『?』「三年程、歳を取ってない気がするんだけど」『そう』「どうなるの私？」『さあ』『フフッ』夕がイヤトリギニ。

short story31 「別れた男」

別れた男の写真に最近よく目が行く。別れて間もないからだと思っていた。けれど、最近おかしい「あれ？やつれた」彼が変化していく。数日後、写真から彼の姿が消えていた。それから『ヤア』と、毎晩、私のところに来るようになった。

short story32 「藁人形」

あの女が憎いんじゃないの「別に怨みなんかないわ」私はそう言いながらあの女の藁人形に釘を打つ「簡単に殺してやるもんか！」今日は左肩にしよう。夫が悪いのよ！私よりあの女を愛してるから……「あなた、おかえりなさい」微笑む。

short story33 「不老不死の少女—2」

「皮膚で時間を感じてみたいわ」少女が言う「どういう意味だい？」「……」「精神年齢ていの？自らの自覚の無い処（ところ）で年を重ねるとどんな感じだろう」また、少女が言う「視覚や音で時間を感じるだけなんて虚しいわ」深遠の瞳が語る。

short story34 「別れた女」

ピチャンピチャン.....彼女が来る。雨の日は必ず花柄の傘を差し（さし）て。俺達は別れ話をしたんだ、彼女が部屋を出て行った。バタンと響くドアの音が虚しくて後を追う！目の前で彼女が事故にあった！俺は.....ガレレレナイ。

short story35 「嘘吐き」

嘘吐きだった私の姉が死んだ。友達とじゃれ合っていて屋上から落ちたそう。姉との最後は喧嘩だった。ある日の夜、姉が化けて出た『麻理（まり）が死んじゃえ！てお姉ちゃんを責めるから自殺したのよ？』と言う。姉は死んでも嘘吐きだった。

short story36 「双子」

無菌室に双子の妹が居る。まるで彼女の苑（その）の様（よう）に無菌室の周りには花や木、小動物が樂園を築いていた。彼女が望めば不可能はなかった。今……無菌室には僕が居る。両親の愛？によって。樂園では彼女が跳ね回るカカカデ。

short story37 「万屋（よろずや） —1」

妖怪と言う奴は自己主張の強えもんだな！姿形に飽き足らず体臭まで主張しやがる。まあ、奴等同士の身分証明みたいなもんだ、仕方ねえか……妖怪相手の万屋（よろずや）の俺は「臭えよ！」『旦那、勘弁して下さいよ』などと言合い商売をする。

short story38 「紅（べに）」

この紅（べに）は貴方と初めてくちづけた時のもの。死体となってしまった貴方に最後のくちづけをする「ねえ、これでお別れなの？」と開かない瞳を見詰め言葉を吐く……『連れて行こうか？』背後から貴方の声がする。紅（べに）を挿し（さし）直し私は……

short story39 「早くアタノ元ニ」

公園の奥には整備された池がある。でも何故か人は近付かない。私はあの人に出逢ったの。池の真ん中に佇む（たたずむ）憂い（うれい）のある横顔。血を流していたっていい。毎夜、私は逢いに行くの。日に日に貴方の姿が濃くなる……嗚呼！早くアタノ元ニ。

short story40 「万屋（よろずや） —2」

「ジジィ！」「なんだ？クソガキ」俺の家系は代々妖怪相手の万屋（よろずや）だ「親父を返せ！」「死んだ」「ありゃ、おめえのとうちゃんが悪い」「……」俺は言葉に詰まる「妖怪になんぞ惚れるからじゃて」「聞き飽きたよ」「あの……」客だ。

short story41 「自殺志願？」

断崖絶壁に立ち海を眺める。背には雄々しい山が聳え（そびえ）立つ「さて、どっちで死ぬか」いつもの自問自答が始まる。ア-アア.....ウツ.....声が聞こえる「死霊よ。時機（じき）、仲間になるから待ってろ」奴等の声を聞く度にヤルキがナクナル。

short story42 「美しい私」

『愛してるの』『私を見て』『美しいわ』僕の恋人は極上の笑みを浮かべながら言う。そして『私の体はいつも綺麗にしてね』恋人は魂になり僕の周りを舞う。最後に言う『私に老いなんて許されないわ！』ミイラになった自分を眺めながら。

short story43 「藤」

藤に愛され死んだ女は思いを遂げて（とげて）貰えると言う。それが愛でも怨みでも。愛された女には藤が絡み付き女は養分になる。絡み付くのは肉体か魂か.....それは言わないで擱こう（おこう）『嗚呼、藤よ』今日も女が死んだ。あの女の願いは？さて.....

short story44 「君がいない空」

俺の見る空は灰色で俺の見る海は赤い。太陽が黒く見え月は青かった。俺の肉体は地に足を付け人間の様（さま）を日々体と心に刻み付けようとする。心なんてもう無い……のに……「なあ、俺独り置いて何故逝ったんだ！」君がいない毎日を繰り返す。

short story45 「招待状」

赤い紙がヒラヒラと飛んで来るらしい。どうやらそれは、招待状との事だ。招待状は手に入れた。目指すは丘の上の洋館『さあ！ゲームを始めよう！』残れば目も眩む金銀財宝。死んだらさあそれまでよ。人と人ならぬ者よ。さあさあ！！

short story46 「眼球—1」

俺の左の眼球には女が住んで居る。そいつは俺の視界に姿を現しては俺を見詰める。部屋に女が尋ねて来ると当然のように俺に纏わり（まとわり）憑く（つく）。夜になるとベッドに這い出し俺の首を時々絞め楽しんでいる。死人の様（よう）な日々の俺にはオアア?

short story47 「死神」

『コイツ、飼うわ』赤い服を着た少女が言う『あんた寿命だったのよ。死神の仕事覚えなさい』隣に居た2メートルを超える男から大鎌を奪い俺に投げ渡す。俺は下敷きになりもがく『フッ』少女が鼻を鳴す。俺の退屈が終わりを告げた。

short story48 「蠢く（うごめく）アル」

闇に蠢く（うごめく）アル。今朝から動けないんだ。時計は午前9時を指す。だが俺の部屋には太陽の光が届かない。アルが居るせいだ。どこから這い出したのか成長している。俺にはもう夜明けは来ないのか.....時（とき）と光が交わらない。アルセダ...

short story49 「悲しいお知らせ」

悲しいお知らせです。貴方の魂と身体は分離してしまいました。これから貴方の魂は現世を彷徨い（さまよい）続け、貴方の身体は人形のようにこの世を徘徊（はいかい）するでしょう……最初に『悲しいお知らせ』と言いましたが、私的には忪沓イダネ。

short story50 「あなたの手で……泣」

私……あなたの棘（とげ）で死にたいの。あなたの毒で終わらせたいの。愛するあなたをこの眼で捕える度、高揚が止まらない。この手で触れたいとどす黒い欲望が渦巻く。殺して……私の魂は毎日絵空事。身体は現世を彷徨う（さまよう）ばかり……泣。

short story51 「女の服」

殺した女の服が毎日俺の家に訪れる（おとずれる）。中身は無い。ある日、その服に火を放って（はなって）やった！次の日、当たり前のように服がやって来た。破いてやった。今日も来た。消火器や硫酸も効かない。引っ越した、来た。あの女、また.....叩か.....

short story52 「復讐—1」

あの日の出来事は忘れない。君は僕の腕の中で逝ったのに。何故、僕はベッドの上なんだ？君が手に入れてあの薬は……ベッドに縛られた僕の所へ来る君は『復讐よ』と愉し（たのし）そうに笑いながら僕を舐める様に見回す。僕は気がふれるのを待つよ。

short story53 「この世の煉獄（れんごく）」

この世にある煉獄（れんごく）。アアー今日も一人来ましたね。一体彼は、何に繋がれて居るんでしょうね？此処の管理人を数百年。人とは面白いもんです『そうですか』『貴方には……でもして貰いましょう』カエリカハ、アタツガイ……クッ

short story54 「この世の地獄」

この世にある地獄。今日のお客様は。おや、善良そうな人ですね？金で放り込まれましたか？さて『今日のメニューは如何致しましょう』怯える様（さま）がなんとも愛らしいですね。こういう人にはサービスしたくなります。さあ……地獄から。

short story55 「陰陽師」

海外の洋館に出向いた。城と言ってもよい規模だった。陰陽師の私達一行（いっこう）は仕事を終える時には私を残し全滅した。帰国後、御礼のメールが来た「そりゃそうだろ！あの館の主（ぬし）は此処に居るからな！」連れて帰ってしまった私はさて.....

short story56 「死人の街」

死人が街に遣って（やって）来る。毎月決まった日に時刻に。僕の街はこんな馬鹿げた所。墓場の近くの胡散臭い（うさんくさい）研究所が事故を起こしてからなんだって。死人は朝までどこかの家のドアをノックしてはその家の前で、一晩中、話をするらしい。ｷﾀｲ？

short story57 「鴉—2」

白い鴉が舞い降りた。今日は人ならぬ者の使いらしいが、さて……おやおや人の子。白い鴉の姿を見てはいけませんよ？特に眼を見てはいけません。人の子よ、あなたが見た事も無いものがその眼にはあるのですから。おや？遅過ぎましたかね。

short story58 「亡者が街に落ちて来た」

俺が天を仰ぎ見たものは無数の亡者が落ちて来る様（さま）だった。ふと俺は思ったんだ...
...「可笑しいな？地獄とは下に在るものじゃないのか？」地獄に落ちると人は言う。まさか地獄が上から落ちて来るとは思わなかった。天を仰ぎ思う。

short story59 「モノクロの虹」

空を見て。壮大と感じる程の虹が目の前にある。しかし虹はモノクロだった。一瞬、目が離せなかった虹からゆっくり辺りに視線をやると全てモノクロに...そして数百年は経っていきそうな廃墟へ変わった。僕が一步踏み出すと世界は戻った。

short story60 「夕闇—1」

夕闇には魔が潜むのをご存知ですか？ええ、人なら知らなくて良い事なのですが.....その魔に魅入られると人は何かを失い狂う。人ならぬ者は.....を引き換えに力を得ると言う訳です。それぞれが凶器や狂喜を手に入れ、さて今宵は.....

short story61 「光の蝶」

光の蝶が空を舞う時、新たな種（しゅ）の魂の誕生を告げます。それを瞳に映した者たちは歓喜や狂喜に震えます。世界は大いに湧き、震える者たちの魂の波動は新たな種の魂にも伝わり...
...その裏側では滅びを選択した魂もあるんですけどね.....

short story62 「掛け軸—1」

尼の様に頭を丸め、艶（つや）やかな赤い振袖を着た幽霊の掛け軸を手に入れた。安値に古物商に文句を言った。すると古物商の親父は「否、出るんですよ」と言う。ある夜、私の髪を引っ張る幽霊は『気に入る髪が手に入るまでは！』と言うさて……

short story63 「妖刀（ようとう）」

妖刀（ようとう）を一族より代われ受け継ぐ事となった。この妖刀。鞘から抜き、刀の姿を見た者を虜にすると言う。案の定、私は魅入られ刀の怪しくも生々しい輝きと匂いの虜となった。毎夜、鞘から出たがる刀を懐に抱き眠る。再び刀の姿を見たら私は.....

short story64 「受け継いだもの」

戦国時代より受け継いだ財宝を示す数え（かぞえ）歌と純金の鈴。ある日、泥棒に鈴を奪われた。困難や貧乏にも今世（こんせ）まで守り抜いたひとつが奪われ、我ら一族は魑魅魍魎（ちみもりょう）、亡者によって滅びの危機を迎えてた。希望の数え歌は、祖母と先日、墓に入った。

short story65 「鏡—3」

鏡の中の私が言う『貴女より綺麗よ』『同じよ』と答える『あげるわ。指を切ったの』ツッ！私の指から血が流れる『こっちに来なさい』私達は入れ替わった。苦し紛れ（まぎれ）に「老いが始まるわ」と言う。ドンドン！鏡を叩く向こう側の私。

short story66 「鴉—3」

赤い鴉が放た（はなた）れた。頂点に立つ為のすべての力の象徴なる赤い鴉。独裁が始まるのか、それとも平和な世界？赤い鴉が左肩にとまるか右肩にとまるかでも世界は変わる。世界が達成された暁には……まあ、滅びしか待っていないんですけどね。

short story67 「滅んだ世界」

滅んだ世界を見て来た。もはや恐怖などは無く疲れだけが残っていた。再び数百年後見に行くと静寂が支配していた。更に数千年後、世界を見渡すと無が世界を支配していた。更に……芽生えを見た。また繰り返すのか？芽は摘み取るか？

short story68 「地獄の門」

地獄の門を見た。別に地獄に落とされたとか連れて来られた訳じゃない。ただ死後、世界を彷徨（さまよ）っていただけだ。この門。黄土色で土のようなもので出来ている。重厚に見える門だが指先で触れるだけで開いた。呼ばれているのだろうかさて.....

short story69 「不老不死の少女—3」

「寿命のある者はずるいわ」「何の努力も無しに時を手に入れる。時を精神に肉体に刻み付ける事が出来るもの」「……」少女が言う。私は言葉の意味の解釈を問う「あなたが理解する必要の無い事だから」深遠の瞳に吸い込まれそうになる。

short story70 「凶られる者」

よく神や天使、悪魔を題材に物語が紡がれる事がありますが、御存知ですか？その物語には時として真実や必然が混ざっている事を。人には知りえぬ事柄ですが.....ただ筆を執らせる者を選ぶ時、寿命と器が凶られ（はかられ）ます。ザンコゲスネ。

short story71 「人柱（ひとばしら）」

人柱（ひとばしら）をご存知ですか？昔々……人柱と称し沢山の人間が壁などに埋められました。ええ、人の為と称し人が人を埋めたあれです。実は人を壁に埋め込むと建物の強度が増すのだとか？聞こえませんか？真実を知った者の声が今日もあの辺りから……

short story72 「闇—2」

新月が生まれる前。束の間のある闇。その闇には関わってはいけませんよ？魔と名の付くものがあらゆる所から這い出して来ます。下衆なものから高等と呼ばれるものまで……『さて人間』関わってしまった人間、クカクカ...クッ。

short story73 「細菌兵器」

此処は死の街腐敗の街。貴方の頭は私の頭、私の頭は貴方の頭。ちょっとその腕貸して足貸して。繋げて人型の出来上がり。食べ物だって勿論食える（くえる）、胃に入ればほら蛆（うじ）が湧く。どうせ死んでる腐ってる。アア、動いてる。細菌兵器て怖いね。

short story74 「見世物」

夜毎、呻き（うめき）声に目を醒ます。地下室の奴の声だ。今日で四日目。俺は地下室に降り奴を眺める。獣（けもの）の様（よう）に鎖に繋がれた奴は、ピッ! 鞭（むち）の音だろうか？ 揮わ（ふるわ）れる鞭に呻く「今日でお別れだよ」観光客の俺は言う。今や霊も見世物の時代。

short story75 「回収屋」

俺の仕事は世間で言う火の玉に紛れて居る残像思念や魂を回収する事だ。この仕事に就いて五年。回収したブツの入れ物は本や壺などもあるが、俺の入れ物はパソコンだ。最近、ブツが脱走する。どうやらネットを楽しんでいるらしい。

short story76 「アカシツレコード」

アカシツレコードに辿り着けた僕は、亡くした彼女のものを捜す。幾日経っただろうか.....
彼女を見つけた。夢中で映画を観る様（よう）に僕は彼女を見詰めた。ふと、自分のものが観た
なくなった。ミツ々.....此処に漂う僕は、自分の肉体の死を観た。

short story77「眼球—2」

不思議な眼球を手に入れた。眼球の使用方法は簡単。自分の眼に押し込むだけで今在る眼球を喰らい定着すると言う。今、瓶の中で眼球は俺を見詰めている。ただ、眼球を見詰め過ぎると育つらしい。厄介だ。さて……とやらを見てやるか！

short story78 「地球」

『人減らしをしたい』と地球が言った。私が何故？と聞くと『生きているから』と返って来た。地球が身震いをするとアジアの国がひとつ滅びた。地球が泣くと世界的に有名な観光地の島が海の底に沈んだ。生きているのは人だけじゃない。

short story79 「結婚」

夕方になると血塗れの女が交差点より住宅街に向かい歩き出す。彼女が事故に合った時は頭から噴出した血を全身に浴び潰れた片足を引き摺り（ずり）50メートル程先の自宅に辿り着くと倒れたそうだ。結婚を前日に控えた日の事。キョウマタ.....

short story80 「呪いのDVD」

『呪いのDVD』が絶賛！大流行！不況の昨今、自殺する気力もない層に大受けだとか。ある時、政府に天国と地獄からクレームが来た。死人の人口増加に対処しきれないと言う。見ぬ振りをしていた政府も、やもなく発売中止に踏み切った。

short story81 「鴉—4」

闇に舞う鴉の影を捕まえた。獲物だ。今宵は満月、さぞいい獲物を嗅ぎ付けたのだろう。影を捕えられ無様にもジタバタする鴉に俺の印を付け放つ。さあ俺を連れて行け。嗅ぎ付けた獲物は妖魔。なかなかの品だ。コイツは高く売れそうだ。

short story82 「赤い月」

赤い月。血が滴り落ちそうな満月を見上げ私は欲情した。貴方に逢える。貴方が好きなパフュームにドレス、銀で作らせたナイフを手にベッドに入る。瞬きをしている間（ま）に貴方は私に覆い被さり偽りの護身用のナイフを滑らせる。獲物の快感。

short story83 「森人（もりびと）」

狂った様に森を彷徨い（さまよい）極限状態になると森人（もりびと）に逢えるという。特に満月の綺麗な夜には特に美しい森人が宴を模様し人間は餌とされる。致死量にも等しい程の生気を吸い取られるが、その快感は忘れられないとのこと……

short story84 「格安物件」

心霊スポット憑き物件 1LDK 格安 2万円。というのを見つけた。何でも風呂場限定らしい。シャワーは使えるがくれぐれ浴槽に湯を張るな！と注意を受けた。試しに湯を張るとわらわらと無数の手が出た。栓を抜くとあけっなく手は流れた。

short story85 「檜（ひのき）風呂」

じいちゃんが楽しみで作らせた風呂場は檜（ひのき）尽くし。いざ！一番風呂へ向かったじいちゃんだが足を滑らせ檜の浴槽で頭を強打。逝ってしまった。翌日から風呂場に出る様（よう）になったじいちゃん、風呂掃除から背中流しまで...イカコレ？

short story86 「靈魂」

暗闇に漂うのが心地良い。この世に未練がある訳じゃない。靈魂という存在になって、ただ夜の闇を漂うのが素晴らしく居心地がいいのだ。靈が靈に出くわすとたまに相手を喰らいそうになる。が、回避している。尠ゝ...今暫く（いましばらく）コノマデ.....

short story87 「万屋（よろずや） —3」

「よう！」「……」 「ジジィ！玄関に立ってるありゃ何だ？」 「おめえのとうちゃんじゃな、クソガキ」 「死んだんじゃ、ねえのかよ！」 「ああ、こっちの世界じゃー死んでるな」 「どうい
うことだよ！」 「おい、客だ」 ジジィが玄関を見る。

short story88 「万屋（よろずや） —4」

「相変わらずだな、親父。息子は後回しか？」 「わしらより先に嫁に挨拶して来い」 「なあ、俺とそう歳が変わらねえそいつは俺のガキか？」 「ああ」 「でかくなったな。十五夜（じゅうごや）に挨拶してくら」 「待て。連れてるそれは置いて行け」 ㄗ.....

short story89 「万屋（よろずや）—5」

「年を食っても十五夜（じゅうごや）はいい女だねえ」「親父」「何だ息子。玄関のあれか？」「ああ。十六夜（いざよい）と俺のガキだ！だが人間臭くていけねえ……暫く（しばらく）面倒みてくれ」「……なんだよそれ」「おお！下弦（かげん）！おめえの弟だ！」俺は親父を睨み唇を噛む。

short story90 「万屋（よろずや） —6」

ッ...舌打ちをした親父が俺に近付いてくる「俺は男を抱く趣味はねえんだがな」と言いながら力任せに俺を抱き締めた「.....行エ。ちくしょう」俺は号泣し「何でだよ」吐いた台詞がこれで「下弦（かげん）。男には色々あらあな」と親父は言った。

short story91 「万屋（よろずや） —7」

「女中兼（けん） 餌だ！コイツも置いていく」何時（いつ）の間（ま）にか五歳位のガキの側に女が立って居た「既朔（きさく）が欲しがったら体液でも血でもくれてやれ匙（さじ）加減は親父に任す。だが、まだ肉はくれてやるな」「判った」「じゃな」軽く左手を上げ敷居を跨ぎ（またぎ）去る。

short story92 「万屋（よろずや） —8」

「ジジィ、そのガキは妖怪か？」「まだわからんの」「下弦（かげん）、お前が面倒を見てやれ」「何だよ！名（な）で呼ぶか？クソガキじゃねえのかよ！」「しゃねえ...女を餌にくれてやる時は頼む」「ああ」『月子（つきこ）です』女が言った。妖怪相手の万屋（よろずや）さて.....

short story93 「赤いハイヒール」

「貴女の番よ」と友人から赤いハイヒールを受け取る。これでやっと今度のパーティーで彼にプロポーズをして貰う事が出来る。当日。彼に身体を預けスローなダンスに酔い痴れる（しれる）。耳元で囁かれる（ささやかれる）言葉に高揚し彼を見上げる「エッ...誰？」

short story94 「夕闇—2」

夕闇に見惚れていた。辺りを悪漢なまでに赤く染める。あの夕闇が赤が欲しくなった。アッ...眼が熱くなり鏡を覗く。私は夕闇を捕えた。それからの私は悪漢なまでの存在感を示し成功を収めた。ただ、人を赤く染める殺意を抱く様（よう）になった。

short story95 「鏡—4」

姿見を合わせ鏡の状態にし真ん中に自分が立つと、背後には過去の自分。正面には未来の自分が映るらしい。未来の私の為、鏡の自分を見ながらどんな時も一番の選択をする。いつもの様（よう）に鏡を見る。前には老婆が.....二十歳の私は驚愕（きょうがく）する。

short story96 「音—1」

信号無視の車に跳ねられ一度に最愛の妻と娘を失った。相手方の言い分はイライラしていた。たったこれだけだった。私は二人を失い、研究と音楽に没頭し、ある音がイライラにダメージを与える事が解かった。だか身体にも影響がある...さて。

short story97 「魂回収業—1」

魂回収業の俺は金に困ると闇ルートで回収した魂を売り捌き（さばき）荒稼ぎをしていた。ところが世間は不況の波というやつで活きのいい魂を回収する事が困難となって来た。等々、金に困り、人外のものにも手を出した俺.....「たまらねえ！」

short story98 「ウツクシ、私」

映画に出れば賛辞。舞台上で歌えば賛辞『ねえ、足りないの満足しない』可憐（かれん）な花に出逢ったわ。ワインにその花弁を浮かべ飲み干す。貴方は生まれたままの姿の私を愛で飾り立て賛辞。けれど、ワインを飲み干すと死.....ウツクシ、花と私だけ。

short story99 「闇鴉—1」

漆黒（しっこく）の闇から切り取り創った鴉。こんなものを使いをに寄こすなどあの男しかいない「私を呼び出すとは相変わらずいい度胸だな」「ああ」漆黒に塗り潰された様な髪と眼を持つ男が気の無い返事をする「仕事か？」「ああ」私は溜息を着く。

short story100 「百鬼夜行（ひゃっきやぎょう）—1」

百鬼夜行（ひゃっきやぎょう）の観光ツアーに出掛けた。年に一度の催しに、人や人外の者など大勢の客が詰掛ける（つめかける）『何故、人外の者が客かって？』百鬼夜行に加われる者はそれなりだからである。今年も例年通り！クッリクッリ...あらゆる行事が執り（とり）行われた。

short story101 「真実の欲望」

とあるバロック音楽を聞くと、高揚し自分の潜在的な真実の欲望に目覚めると言う。私はその音源を手に入れた！最初の旋律はパイプオルガンで奏で（かなで）られた。次第に高揚して行く私はナイフを手にと.....血を見る事が私の真の欲望だったとは。

short story102 「多重人格者」

身体の弱い私は16歳になっても家から出る事が出来ない。友達も鏡に写る自分だけ。ある日から鏡の中の自分が一人二人と増える様（よう）になった。鏡に収まり切れない自分は私の身体の中に入った。多重人格者となった私は、何故か、丈夫になった。

short story103 「ただひとつの宝石」

古（いにしえ）の時代より続く儀式が一族にはあった。ある場所で採れたダイヤモンドの様（よう）な輝きを持つ宝石を、選ばれた人間に飲ませ、死後、焼くと、世界でただひとつの輝きを持つ石になる。この石の御蔭で一族は裕福だが、魅入られた人間は……と言う。

short story104 「死人」

血塗れた（ちまみれた）場所をピョンピョン……と音をたて私は歩いている。辺りには無数の人の死体が転がる。やがて窓の外には火が見えた。出口を捜す『窓しかない！』飛び込んだ。その途端、身体が浮かび上がる。私は、死んでいたらしい……

short story105 「万屋（よろずや） —9」

『旦那あ余興（よきょう）でさあ』目の前では人の霊魂が喰うか喰われるかの喰らい合いをしている「まあ俺には専門外だぜ」『おひとつ』色香（いろか）を漂わせ轆轤首（ろくろくび）の姉さんが酌（しゃく）をする『旦那、いい呑みっぷり』うなだれかかる姉さんに気を良くし宴を楽しむ。

short story106 「万屋（よろずや） —10」

「ジジィ！説教はてめえの分野だろ！」「何だ、クソガキ」「この馬鹿夫婦に言ってやれ！」「おめえもビ-ビ-泣くんじゃねえ！一応妖怪とはいえ男だろうが」「大体なァーその札（ふだ）は……」夫婦喧嘩の末、札に隠れた女房を出してやる。

short story107 「万屋（よろずや） —11」

「この札（ふだ）は必要ねえな」『嫌ですよお旦那～あちきはこの人の暴力にどう対抗するので？』「その為に奴の術を札で受けろと言ったはずだがな」『旦那あ』甘い声で言う女房に札を取られ「帰れ。奴が今にも飛び掛けて来そうだ」『フッ』

short story108 「魔界セラピスト—1」

「血ですかね……」刀鍛冶の祖先は、師匠の娘を巡り刀創りの勝負に負け自棄（やけ）になり女に走る。曾祖母（そうそば）は水屋の若旦那と十二歳で駆け落ち。私は……『で？妖魔の私に？人間相手の相談は受けてませんが……』「ええ、妖魔と別れたくて」

short story109 「物書き」

『よう！人間』縁側から何やら影が喋る『ネタに詰ってるのか？物書き』『なんだと！』私は少々声を荒げた『よう、俺を飼わないか？俺は鬼だ。ネタには困らねえよ？』『人間の器を越えた話を聞かせてやるよ』私は鬼を飼う事にした。

short story110 「大人の絵本」

大人の絵本というものを手に入れた。その絵本を読みながら、私は、うとうとと眠りに落ちた。気が付くと見たことのある風景。どうやら絵本の中の様（よう）だ。私はあらゆる快樂に身を任せ、最後には自ら（みずから）喰らい付いていた。私は.....絵本の養分となった。

short story111 「練習」

月明かりの下で血塗ら（ちぬら）れて行く（ゆく）あの人を想像するの。何度も試したわ練習したの。この死体.....残骸の山を見て？バルコニーに立ち月を見上げ、裏切ったあの人を思うの。さあ、いつ罌に掛けようかしら「フツ」あの人を為に.....今日も練習をしよう。

short story112 「月の色に染めて」

白き月を見て。赤く染まる月を見て。青く輝く月を見て。黒に堕ち行く月を見る。私は瞳に月を映したまま辺りを黒く染めて行く。何かを覆い隠そうとしている訳じゃない。むしろその様（さま）を曝け（さらけ）出す様（よう）に……黒の闇の色に映るその様（さま）は……ニヤリ。

short story113 「墮ちて」

深く。白夜の世界を進み行く。周りには凍り付いた赤い花が一輪。連れて行こうか置いて行こうか。霧が導く様（よう）に私を包み前へ前へと.....「！」白夜のその先に闇の面持ち（おももち）の男が居た。罨に落ちた？圧倒的な存在感。逃れ（のがれ）られない.....夜が来る。

short story114 「闇—3」

青白い夜。何時（いつ）まで経っても夜が闇色（やみいろ）に染まらない。あそこに潜む陰も向こうに見える気配も皆闇を待っている。今かと待ち焦がれる夜に、爪を磨ぎ過ぎた者達は誘惑に勝てないかもしれない。こんな日の狂気は、無情なまでにすべてを引き裂く。

short story115 「人形師—1」

繰り返す夢の中で私は刃物を振り回し殺人を犯していた。切り刻んだ身体を元に戻すように縫い合わせ一息付いた頃に目覚めた。人形師である私は、工房に入る度、気味の悪い一角を避けて来た「やはりそうか……」一角（いっかく）には夢の残骸が残って居た。

short story116 「魑魅魍魎（ちみもうりょう） —1」

闇に蠢く（うごめく）魑魅魍魎（ちみもうりょう）。俺は昨晚から睨み合いを続け、互いにいつ飛び掛らんとする意を眼球に込め、更に睨み合う——飛び掛ったのは俺。気が付くと、奴らの手足や胴を喰い千切り、辺りは、得体のしれない体液と異臭……ふと、窓の外を見た。ヅカ
`夕カ……

short story117 「殺意と間違い」

「そうだ！生まれ直せばいいんだ」包丁を片手にリビングで掃除をする母に飛び掛り腹を裂く。その途端、後頭部に衝撃が走り「育て方を間違えたみたいだ」と散弾銃で父に打たれ「結婚が間違いだった」と母は父にガラスの灰皿を投げた。

short story118 「万屋（よろずや） —12」

『旦那、すいやせんねえ〜』雨の降る夜は、妖怪共の宴（うたげ）の場（ば）に奥座敷がたまに使われる。雨の匂いに人間や妖怪、この世の匂いが溶け込み流される。上も下も無い、己（おのれ）を縛る匂いが無くなる夜『旦那、駆け出しも連れて着やした』「まあ呑め！」

short story119 「血を流す絵画」

血を流す絵画を病院で購入する事となった「今日は何型の血液だ？」「O型の様（よう）です」「頼むよ、たまには絶対数の少ないRH(-)AB型とか流してくれよ」と医師が言った。機嫌を損ねたか、翌日より、日本人に多いA型を流す様（よう）になった。

short story120 「万屋（よろずや） —13」

「下弦（かげん）、万屋（よろずや）の看板は無いのか」「にいちゃんだ！既朔（きさく）」「フッ」「このやろ舌打ち……まあいい。既朔には見えねえのか？おめえ確かに人間臭え」「下弦、てめえは人間じゃねえか！」「月子（つきこ）、庭に居る害のねえ妖怪を見せてやれ」『あい』

short story121 「赤い涙」

赤い涙を流す君。ハラハラと頬を滑る涙の雫は官能的ですらあった「君は人間なの？」ある時（とき）聞いてしまった「涙の色は体質みたい」「悲しいから泣くの？」「ええ、この世のすべてが悲哀に満ちてる」君は僕には分からない何かを見詰める。

short story122 「僕の赤」

見付からない僕の赤。肖像画の君を飾るフィナーレは真っ赤な薔薇。それなのに.....僕はすべてのものに怒りを感じ、フィナーレを飾れない君の絵を見て思わず手にしていたペンティングナイフを突き立てた。心臓から血が流れ.....「これだ！」

short story123 「天使と涙」

見上げた空では天使たちが戦をしていた。敗れた者は地上に墮ち鮮血に眩いばかりの白をすべて染め無情な姿を晒す。天使の亡骸で地上が埋まるのではないかと思われた。人間が涙を流した。初めて自分以外のものの為に流す涙を覚えた。

short story124 「僕、神様」

『僕、神様』椅子に片肘を付き気だるそうに男の子が言う『思い残す事あるの?』と聞かれ「百歳まで裕福に暮らしたかった」と答えた。目覚めると事故に合う前日。私は百歳まで生きた『思い残す事無いよね?』と言われ「いや!まだ!」

short story125 「昨日を待ちながら……」

昨日を待ちながら今日を生き、明日を恨めしく思う。私は昨日が欲しいの。妖魔が私の手を取り昨日へ導く。昨日のそれを取り戻すには昨日の私を始末しなければならない。契約の代金に妖魔は今日の私が欲しいと言う。出口が無い。

short story126 「狂喜乱舞の光景」

狂喜乱舞の光景を月が空から零れ落ちそうなくらい大きな夜に見た。余り月が照らすから見てはいけないものまで見える。余り月が輝くから舞う者たちは止まる事が出来ない。余り月が...
...「貴方のせい」 何う.....力なき者たちの末路が見える。

short story127 「夜話」

月が綺麗な夜に縁側に座り、キラキラと宝石が静かな舞いを踊る様な庭先の池を眺める。鹿威し（ししおどし）の音が静寂を引き締め、闇に深さを導く。そんな夜は決まって鬼が来る。能の面を被りおどけた様（よう）に音も無く現れ.....私たちは夜話を楽しむ。

short story128 「俺の中の獣（じゅう）」

俺の中に獣（じゅう）が目覚めたのは新月の夜だった。月が満ち行く満月までの間、俺の中の獣が力を増す。月を見る度、俺の中の人の心臓がドンドンと内から跳ね上がり肉体にぶつかる。すべての能力が人間の数倍となり……女を生贄に喰らい納める。

short story129 「不老不死の少女—4」

「所詮、人間と呼ばれる者が想像するものなぞ全て実在する。ただ、実在するという事を人間が認識出来ないだけよ」少女が言う「どうすればそれが見れるんだい？」問う「愚問。寿命というものを魂が受け入れた時から見える事は無いわ」

short story130 「魂を見る眼」

日に一度。魂が空へ昇る時刻がある。それを見る眼を持つ一族が我ら。ただ、何をするでもない。空を見上げるだけだ。昇る魂に何があろうと我らは傍観者。逆流する流星郡の様な時があれば.....目にするものを驚愕にせしめる魂もある。

short story131 「主様（ぬしさま） —1」

ヒタヒタ.....雨が降り月が煌々と輝く宵の口『エッ？そんな夜は在り得ないて？』『見えぬのは人の子』ヒタヒタ...今宵は祭りじゃ宴じゃ、否、儀式か生贄か。マキヌ！タシモウ！『オッ！』主様（ぬしさま）の御出座し（おでまし）に皆が沸く。

short story132 「彼岸花」

一面に咲く彼岸花。炎が咲く様。あちきは、ズリ、ズリ、と引き摺ってあの人を埋めに行く。あちきの真白い（ましろい）着物も赤に染まるかしら？炎に焼け付くかしら？彼岸花の花畑。あちきはあの子の側に寝転がる。雨が降る。もう、このまま……

short story133 「姉さん椿（あねさんつばき） —1」

「わっちが死んだら椿の木の下に埋めてくんなまし」姉さんが死んだ。謎。皆は呪いだと言った。事ある事（ことあるごと）に姉さんの椿の元へ……「助けて！」必死で走った。ズボッ！椿の根元から手が伸び、グァァ！男を地面の下へと引き摺り込んだ。

short story134 「才能が死ぬ時」

「才能が死ぬ」と言いながら作業を止める事が無い「奴が言うんだ」彼は自分の作品を睨みながら言う「才能が死ねば私も死ぬ」悪感なまでの光景に私は言葉を失い。やがて彼を失った『やあ』声がる方向を見た。彼の彫刻は生を得た。

short story135 「私の青」

流星群をアルコールに酔い痴れながら見た。私の錯覚か「青」を見た気がした。夜中、気配を感じ目覚める『私の青を返して下さい。君の瞳の中に……帰れない』何か……居る？『私の青です』恐怖は無い。返したくないと思った。美なる存在……

short story136 「輝くものは？」

「死ぬ事がキラキラと輝く」絶望を前に言葉が唇から零れ落ちた。貴方が居ない世界「違うよ、輝くのは生きる事だよ」事故で眠っている貴方が言う「！」目を見開き貴方を見る。眠っている？絶望……否、貴方が瞬きをし、そして目覚めた夜。

short story137 「魔神と俺—1」

「俺。狙われてる?!」全力で逃走中『おうよ』『クッ』やっちまった!路地で袋小路だ!『てめえ!魔神の俺から逃げられると思うのか?』『誘導くれえ気付けよ絶望的だよ』『見える人間。面白れえ!飼うしかねえだろ』『待てよ……』

short story138 「サバトの書」

「サバトの書」を手に入れた。それからの私はすべてが順風満帆。気が付くと周りには新しい人間関係が出来ていた。何気なく「サバトの書」を開く。見た事も無い文字が読める。絵の男がニヤリと笑う「アア、そういう事か...」宴の準備だ。

short story139 「不老不死の少女—5」

「人の子が真理に近づく事は無い」少女が言う「何故そんな事を？」問う「寿命が脳を支配し、脳は身体を支配する」「すべては寿命だと？」「そうじゃない」私は考え込む「果てを見たいか？見れると思う？」「分からない」「そういう事」

short story140 「隙間」

隙間『貴方は隙間の世界を見た事がありますか？』『お勧めはしません』何故なら彼らは狙っています。多くの隙間を創る為に。人が一人隠ればその分だけ隙間が出来る「意味が判らない」て？見れば.....ア、見るなと言ったばかりですね。

short story141 「鼓動」

地上で打つ鼓動はすべて等しい。人間も動物も植物さえも等しく鼓動を打つ。人間には見えぬ者たちの鼓動も地上に在るならば等しく打つ。これは自然な事。寿命を刻まれた印。その美しい鼓動の奏でる音を聞く、創世者の憂鬱と至福。

short story142 「闇鴉—2」

「世は無情」貴方の憂鬱な美しい横顔を見ていた私に響いた言葉。摩天楼から闇を見詰めている貴方「闇のような男……貴方に言われたら世も末ね」私は毒づいてみる「ああ」「今夜も闇鴉を飛ばすの?」「ああ」今夜の仕事に身震いをする。

short story143 「青い薔薇」

青い薔薇を手にと求婚をしてくれた人と結婚をする。私の幼少からの夢。大人なり青い薔薇はこの世には無い事を知った。でも私は.....ある日、見知らぬ男性が青い薔薇を手にと玄関に立っていた。この世の者じゃない？.....私にはお似合いかしら？

short story144 「小箱」

小箱を受け継いだ。外に散りばめられた宝石の値打ちだけでも数億はすると言う。一族から叔母へ。後継者を私と決めたいらしい「箱は、夜、開けてはならない」これを守れば最高の人生が送れるらしいが.....箱を開けてみた、中身は地球。さて.....

short story145 「生まれ直す」

「そうだ！生まれ直せばいいんだ」母親を殺していた。生まれ直せなかった。隣の母親と呼ばれる人も殺した。駄目だった。また母親を殺した。また駄目。……今日、十三階段を登る。ダンッ！「嗚呼！」これで生まれ直せる！モッカハ……ヒイ！！

short story146 「かがミカがミ……」

母が言う「貴方より綺麗よ」私は目を丸くした「鏡を御覧なさい」私は鏡を覗き込む「フッ、綺麗」母が『綺麗』と口にする度、私は年を取る様（よう）な気がする「ママ、どういうこと！」「フッ、鏡に御聞きなさい」かがミカがミ……

short story147 「花達の囁き」

散り行く花。僕が散らした花。貴女は何故逝くの？僕と貴女で創った花達。貴女は「花が言うのよー私が嫌いだって！必要無いで！」「花が喋る？」「彼女達は貴方だけを愛しているわ」花達の囁きを聞いた。アノナ!シヅヤI.....

short story148 「プロポーズー1」

「愛してる」の言葉とプロポーズが貰えない私は鏡の前で洋服をとっかえひっかえ、メイクや髪型を色々と試行錯誤する「77、完璧」デートに挑むが今日も玉砕。もう我慢出来ない！私は惚れ薬を使う事に。彼はアレルギーだった。玉砕.....

short story149 「プロポーズー2」

鏡の前でプロポーズの練習をする。デートの前に何回か練習するもの上手く行かず、踏ん切りも着かない。今日こそはと鏡の前に立つ「け、結婚してくれ」と、言葉と共に指輪を差し出した『ええ』鏡の中から声がした。美人だ！まあいいか.....

short story150 「静寂の果て、闇に魅入られて」

静寂が月の輝きを引き立てる今宵。人も人ならぬ者も闇に魅了される。魅入られた者達が向かう場所。闇の果てへ……辿り着いた者達は、歓喜に溢れ、号泣し、果てる。宴は闇が在る限り続き、果ては限り無く。そして扉が現われる。此処から先は……

short story151 「アタハドコ？」

果ての無い道を私は歩く。貴方が死んだから.....貴方と私の道は果てし無いものになった。私が死ねば、また一緒に歩けるの？「貴方に逢いたい、幽霊でもいいから.....」ある日から、幽体離脱というものをする様（よう）になった。が、アタハドコ.....

short story152 「魂の存在」

「魂は存在する」そんな事を人の子に説いても虚しい気がした。人であって人で無い私は、この身体で魂を見る事は勿論、触れる事も出来る。危害を加える事も……肉と魂の見極めも判らぬ、波動ももはや届かぬ。哀れ。人の子に伝えるもの無し。

short story153 「復讐—2」

散り行く花。季節が花を散らす。広い庭に貴方の言うとおりに、あの花を植え、三年待ったわ。貴方は帰らないと知っていた。五年後。女と共に屋敷を訪れ、夫である貴方にすべての財産が渡った。あの花の毒で死んだわ『フツ』復讐してやる。

short story154「万屋（よろずや）—14」

「下弦～」 「にいちゃんだ！既朔」 「フッ」 「下弦、俺え～暇だ。万屋やる」「はああ？」 「おめえ、まだおしめも取れねえ～だろうが！」 「てめえ！下弦！」 「俺は人間の年の数え方だと、十五ぐれえだよ」「何だと？」 「何だよ」俺は困りはて……

short story155 「万屋（よろずや） —15」

「ジジィ！あのガキ！既朔を何とかしろ」「何だ、クソガキ、根を挙げたか？」「既朔が、万屋、やりてえとよ」「好きにさせろ」「はああ？」「よう、下弦。ジジィも好きにしてい。てえ言ってるだろうが！」「はあああ？」俺に厄介事が増えた夜。

short story156 「万屋（よろずや） —16」

「ジジィ、今日はお産だ！」「奴を蛙の旦那を足止めしてくれ！酒を喰らわせてもいい！」「何だ？あの嫁御。まだ本性を見せとらんのか？」「ああ」「まあ、いくら妖怪でもよ。普通、言えねえだろうが……」「嫁御が蛇で、旦那が蛙なんてよ！」

short story157 「モノクロの風」

モノクロの風が頬を撫ぜる。来た……決まって未来の街並みが目前に広がる。未来に一步を踏み出す事に躊躇し、目を逸らす事に戸惑う。私は歩き出す。未来の光景。目にしたく無いものが飛び込んで……「嗚呼、此処では……」痛いよ、コガ……

short story158 「名取」

日課になった日常は繰り返される。名取を最年少で許され、将来は流派を継ぐ事になっていた息子が死んだ「お母さん、お祖父さまが認めてくれたよ！名取だ」息子は、朝晩の稽古を舞いを、今も欠かせない。その透けた輝く身体で.....

short story159 「主様（ぬしさま）—2」

ギシギシ.....廊下で足音がする。今日は、四十五番目の部屋に寝る。祖母は「主様（ぬしさま）が来る」そう言いながら女だてらに事業を成功させ家を建て続けた。敷地は五万坪を超え、本家や離れでまるで迷路「捕まるな喰られる」祖母の最後の言葉。

short story160 「万屋（よろずや） —17」

『夢を買いますよ、旦那』大学とバイトの両立に疲れ切っていた俺はその話に乗った。最初は良かったんだ。身体は楽になるし、勉強の時間が増えた。しかし……「よう！そこのガキ。馬鹿か、おめえ？」男が声を掛けて来た。名刺には「万屋」……

short story161 「残した影」

残した影が見えるの。あの影もみんな交通事故で亡くなった人のもの「ねえもう」疲れたよ...
...これじゃ街中、影だらけになっちゃうよ！「影も、連れて行きなさいよ！」つい、出た言葉...
...「お姉ちゃん。私も見えるの」少女の言葉に救われた。

short story162 「事件現場」

私を通った後は血塗られて行く。別に私が殺人犯という訳じゃない「刑事さん、いい加減にしてくれない?」「まあまあ」「何回、現場を再現しても結果は同じだと思うけど?」「いやいや」私は事件現場を再現出来る能力があるのだが.....

short story163 「先妻の子供？」

『いち、に～』娘が庭先で毬を付く。キィ！車に跳ねられ死ぬ。毎日の繰り返し「もう厭なの。いくら先妻の子だからって車の多い時間に庭で遊ばせたのは謝るわ」「何？」「出るのよ千代の幽霊が！」「俺には先妻も子供もいないよ」

short story164 「魔がさす」

太陽が真っ赤に焼け沈んで行く。辺りは肌が不快感を表すような湿気を帯び、噎せ返る表現のし難い悪臭。人間の匂いとも魔の匂いとも付かない。こんな日は決まっている。街を訪れる魔。気付いた人間の悲劇惨劇『さあ、参りましょう』

short story165 「みーちゃんの赤いリボン」

「みーちゃんの赤いリボンかわいいなあーかして？」「やだ」悪戯のつもりで、彼女の髪からリボンを取り、走った。追い掛けて来る彼女は、目の前で事故に……「赤いリボン可愛いよ！」と、娘の髪に結ぶ『みーちゃんも……』最近聞こえる彼女の声……

short story166 「前世の記憶」

人間、死ぬ時は走馬灯の様に……とはよく言ったもの。私は、人を庇って刺された。記憶を辿り、逝く事を受け入れる『何？この記憶！私、誰かに刺されて……』クマ材！二度も刺されて死ぬなんて！と思い目覚めた。前世の記憶で蘇った私……

short story167 「霧の芸術」

緩やかなラインを霧で描く『フツ』君が死んでから僕に見せてくれるショー。最初、君は……僕が影を捕らえ、君を逝かせない事を責め嘆いたね。そう……僕は君が居なければ生きて行けない。ここで生まれる芸術を皆楽しんでくれてるよ。

short story168 「欲望の器」

闇のカーテンを天から降ろし街を支配する。己の器が溢れた人間たちは面白い程、狂喜乱舞する。己の器に並々と欲望を露わにし示す人間。我らが獲物。闇からギラギラと卑しい光を放つ様（さま）は、我らですら恍惚とする『さて獲物を狩るか！』

short story169 「超能力だけど……」

俺は超能力を持っている！今日、出逢うであろうものたちが分かる。俺にはお見通しなんだ！あの影も、そこに居る自殺したであろう霊も。あれは浮遊霊、こっちは自縛霊。夢の中ですべて予習済みだ！だが……こんな能力、何の役に立つんだ？

short story170 「泣くことが重症」

毎夜、赤い月を眺めていたら、涙は赤く。血は無色透明になった。交通事故に遭ったがサラサラと透明な液体が流ただけで傷は無かった。今……病院のベッドに居る「そういえば昨夜……」映画で感動して涙を流した。泣くことで重症になるらしい。

short story171 「悲恋が好物」

僕は悲恋が好物だ。最近の世の中は多様化というものによって様々な悲恋が楽しめる。けれど……「食当たりしそうだよ！」「パソコン内の悲恋て何？三日で終わる悲恋て何？」人間同士は触れ合わないのか？情緒は？妖魔の僕は首を傾げる。

short story172 「住宅街の人間」

肉の匂いが過ぎる程付け入りやすい。人間が好んで住む住宅街とやらは隙だらけ。人間は己の肉の匂いにまったく気付かず.....垂れ流す。蠢く（うごめく）徘徊する何かにも気付かない。何を仕掛けられ何を奪われ.....『アハッ！』『無様だね！人間！』

short story173 「腐臭する魂」

腐臭を漂わせる魂が人間の間で最近増えている。新たな臭いの感覚に嫌なものを感じる。次の幕開けが近いのか？時代や世界の始まりか？滅びの秒読みでも開始されたのか？それとも……混沌が迷宮へと誘うが……「見てやろうじゃないか！」

short story174 「エクソシストに転職？」

エクソシストの帽子を買った。海外から帰国。家に着くと荷物が届いていた。中身は服だった。イタリア語で「Grazie per l'acquisto del cappello. È il vestiti del set（帽子のお買い上げ有難う御座います。セットの服です）」とあった。何故、住所が判るんだ？それから俺は転職した。何故だ！

short story175 「コレクションは……」

結婚するまで分からなかった彼女のコレクションは棺桶。日本のものから海外のものまで、種類も豊富だった。ある日、彼女が心臓麻痺で逝った。ベッドにまで使ったいた棺桶で送ることに……「待ってよ！自分で選ぶわよ！」彼女が目覚めた。

short story176 「人の目は？」

人の目は眼球は退化したのか進化したのか？古より使いに出している魔が見えぬと人間が言い出す。供として近年生まれた魔獣のキメラを付ける。が、こちらの姿は認識出来ると言う。困ったもんだ。これでは、人間と我らが関わる意味が.....

short story177 「空の上から」

「ねえ空を見て」彼女が言う。見上げるとさっきまで橙色に輝いていた眩しい太陽が黒に変わっていた「あれ……なんだろう、羽？人が空から……来る？」彼女が呟くように言葉を口するや否や……頭から彼女が霧の様に消えて行く……「何だ！」一体……

short story178 「人形師—2」

私の手を返して。私の足を返して。私の頭を胴を……死んで私は、天に召されそうになったところを偶々（たまたま）見つけた人形師の工房の人形に宿る。まだ知られてはいない。毎夜のように繰り返される惨劇を見ながら……私は私の終幕を降ろす為に……

short story179 「21世紀の魔女狩り」

惨劇から一週間。街は妙な喧騒と沈黙を掲げる集団の鎮座。21世紀という時代に魔女狩りなどと馬鹿げた行為の付けか？太陽が狂った。闇が呻く。世界の空気が意志を得たのか？その振る舞いは澄み切り……肉や魂が媒体となる人間が……

short story180 「意志の疎通」

気付けば.....動物も植物も言語という手段を使い地球と意志の疎通を為していた。明らかに人は出遅れてしまった。人は焦り、まずは動物、植物との意志の疎通が出来る様、謀るが.....最近、目に見えて当たりがきついと感じる.....「どうする人間！」

short story181 「chaos」

混沌が広がりカオスの螺旋階段が天に届く。当ても無く、ただ.....形ある螺旋階段を昇る。一段一段、登る階段は曖昧な感触で景色を見回すと、眩暈と吐き気がする。それに堪え上へ。僕が見た世界（もの）は、見知った地上と見知らぬ世界が広がっていた。

short story182 「姉さん椿（あねさんつばき） —2」

「わっちも、姉さんの元へ……」年季明けも近くなった私は、犯した悪事の数々に嫌気が差したか……姉さんの椿の元で泣いて居た。気が付くと、姉さんの手が根元から出、私を抱き締める『逝ける』と思った私が見たものは、震える椿が流す涙だった。

short story183 「後回しの付け？」

空気が「生」を得たから「さあ！」「大変！！」各地で思わぬ自体が発生していた！中でも相性の問題が一番となり、空気に嫌われると、息が出来ない人間や動物、植物までも現われた！何でも環境問題は後回しにしていた人類！付けが廻って来たか？

short story184 「闇鴉—3」

「心が悪に染まろうが、善に仕えようが変わらない。それは人間側の言い分だろ？」『お前、人間だよな？』「ああ」『闇鴉なんぞで、俺様を呼び付けるような奴だよな？』「酒位、呑ませろ！」『いつも「ああ」しか言わない……』「くどい！」

short story185 「深まる闇」

皆が気付かぬことを口にするのもどうかと思うが.....最近、闇が深くなっている。どれだけ人の子が灯かりを点そうと、増す闇の深さには人の子が敵う訳が無い。継る様に人の子の灯かりに群がるものも、新たに闇に巣くうものも.....が必要だ。

short story186 「掛け軸—2」

「出る」掛け軸を買った古物商の誘いで店に行く「否、お客さんなら……ものはいい……んですがね」と、雄雄しい虎の掛け軸を見せた「呑むんですがね」「呑む？」「さ、酒をですね」独り轆轤（ろくろ）を回す俺には似合いかと「買った」「有難うございます」

short story187 「掛け軸—3」

邪道だとは思いつながら床の間に、幽霊の掛け軸の隣に呑む虎の掛け軸を掛けた『ものはいい』と言っていた親父の言葉通りいい眺めだ。今夜の酒は旨くなるなと独言（どくげん）。虎にも杯を用意してやる「まあ一杯」が、呑む気配無し「いいさ」酒が進む。

short story188 「掛け軸—4」

酔いも回り、障子の向こうの月明かりが程よく照らす頃合に行灯（あんどん）に火を入れ、晩酌を続ける。ふいに掛け軸を見ると……「おい虎。前足が出ているが……」ひょい！と、掛け軸から出た虎が、俺の周りを回り出す「おい」威嚇をする眼つきに俺は……

short story189 「掛け軸—5」

肝を据え晩酌を続ける。ぐるぐると俺の周りを回っていた虎は、気が済んだのか俺の用意した杯をペロリと舐めた。ペロペロと旨そうに酒を舐める虎を眺めていると、杯を持った男の腕が俺の前に出た「旦那、この方が呑みやすいもんで」虎め。

short story190 「闇の獲物」

闇は夜のものとは限らない。あなたが迷い込んだ路地裏で『ほら、そこに』眼にした闇は、昼の光を喰い殺す様に闇という涎を垂れ広がって行く。その、ねっとりとした闇に、釘付けになったあなたは……『そう、闇の獲物でしかない』『クッ』

short story191 「硝子の眼球」

眼球を集めるのが趣味です「震えないで？」私が集めているのは、硝子の眼球。生き物の眼球には手が出ませんから……いえ、興味もありません。美しい硝子の眼球が、私は映し出す。己の醜さに姿を隠したくなる。けれど……見詰められるこの、快感。

short story192 「呪いの階段」

呪いの階段を見に行くことにした。もうひとつの謂われが、縁結び。この奇妙な取り合わせに盛況らしい『愛を確かめてから……』注意書きを途中まで読み、彼女に急かされ登った。帰り道。彼女の影の足が無い！階段のオブジェは……そうか！

short story193 「魂回収業—2」

群れると孤独が恋しくなる。ガキの頃から寂しさが判らねえ……そんな俺が、魂の回収業てな仕事を血のせいか……似合いだ！などと続けている。足が着いたか！人外の魂を裏で売り、荒稼ぎしていた……「俺みたいなチンピラの回収屋に何の用だ」

short story194 「魂回収業—3」

『チンピラ？おやおや、その様な者が、人外の魂に手を出したんですか？』 「ああ、金がいいからな」 『ほう』 「俺を始末しに来たならやれ！生（せい）に興味はねえ！」 『まあ、随分と……』 『私が誰か、お分かりで？』 「……」 『仕事の依頼ですよ』

short story195 「魂回収業—4」

『手配書です、記した魂を回収して下さい』「犬にはならねえ」『お好きな金とやらも、好きなだけ支払いますよ？』「下らねえ」『おやおや、貴方が無所属で仕事出来るのは、何故でしょう？潰しますよ？』「……ちきしょう！」『クッ』

short story196 「魂回収業—5」

「……家のもんには手を出すな」『気に留め置きましょう』『期限は受けねえ、報酬は見合ったものを頂く』『承知』『では、刀（かたな）。私の名は……』『人魔の蒼星（そうせい）……』『存じて頂いていましたか、クッ』『ではこれにて』俺の絡み合う糸の始まりの夜。

short story197 「薔薇園」

ハ°刊!と夜中に目が覚めた。再び寝ようと寝返りを打つが.....「ん？」何処からか、クラシックの様な.....切ない調べが流れ込む「庭？」父の手入れする薔薇園の側に人影が.....妖精？否.....薔薇園に、美しい妖精の様に漂う。死んだ母。真相を知る。

short story198 「政府の目論見！景気回復？」

『呪いのDVD』の件で、天国と地獄に頭の上がない政府は、双方からの願いと言う鉄道を
開通した。何でも、娯楽？に飽きた天国と地獄の者達への観光地に、この世が選ばれたらしい。
政府は、景気回復に繋がるかも？と大はしゃぎだとか.....

short story199 「万屋（よろずや） —18」

「既朔だ」「ありゃ夢喰いだ！おめえ『夢を買いますよ、旦那』とでも、唆された（そそのかされた）んだらう？」ギク！「ガキ！金で夢を買う夢喰いはいけねえ。おめえ、中身が空っぽになりてえか？」「なっ！」「くれてやった紙の住所（ところ）へ行け！」俺は……

short story200 「百鬼夜行（ひゃっきやぎょう）—2」

百鬼夜行の鈴の音が宵闇に響く。その音は数十種類.....祭を知らせる音。獲物呼び寄せる音。そして.....鈴の音が響けば、更に賑わいを増し、響けば響く程に百鬼夜行に加わった者たちの格は上がる。宵闇に露わ（あらわ）になるその絶景たるや！刊ッ.....

short story201 「月の兎」

「ねえ、月に兎が住んでるって本当ね」窓越しに月を眺める彼女が小鳥のような声で囁き（さえずり）言う「そう」僕は囁きが心地良く……「あれ？兎と目が合ったわ！やだ！ち、近……」
「え？」兎が鮫のような歯を剥き出しに落下して来る！キァァ！ウァァ！

short story202 「麻理ちゃん—1」

「パパ、あのおじさん。どうして何度も車に轢かれる（ひかれる）の？」 「どうしたのかなあ—麻理は？」 「あのおじさん、変だね」 「麻理には変に見えるおじさんかあ—」 「パパの手を放しちゃ駄目だよ」 「うん」 私には見えるのに.....可愛そうなパパ.....

short story203 「麻理ちゃん—2」

「ママ、麻理ね、あの叔母さん嫌い。いつも腰に男の人をぶら下げて来るんだもん」「あら、昨日のサスペンスドラマが怖かったのかな？」「怖くなかったよ」「そうか」微笑み頭を撫ぜる母。数年後、遺産相続で叔母が殺した男の事件発覚。

short story204「高貴な宝石？」

宝石に魅入られた。ネックレスだけでも十億。イヤリングとリングを合わせると三十億弱。この宝石。相手を選ぶと謂われ、気に入らぬ相手からは宝石商に戻る。熱病に犯された様に金を稼ぎ、宝石を目の前に.....私は愛されるだろうか.....

short story205 「Vampire—1」

赤い霧が都会の街並みを包み……冷えた風は花の香りを運ぶ。雷鳴が不気味な空を飾り……『獲物だ』私は音も無く……バチン！「この蚊は！また私の血を吸いに来たのね！」平手打ちを喰らった『ヴァンパイアだ！』たまには格好を着けさせろ……

short story206 「彼は私のもの？」

「愛してるのよー」私は彼を何度も刺した。気が付くと彼の胸が肉片になる程に.....私は彼の部屋を飛び出し、血塗れで街を彷徨う。キー！車に跳ねられ、呆気無く私も逝った。あの日から、彼が離れない。うっとおしい.....『殺すんじゃないわ』

short story207 「晩秋の誘いは桜を狂い咲かす」

狂い咲いた桜。この湖畔に、これから眠り行く生へ子守唄を贈る様に.....晩秋は桜をただ.....切なく眺める。一筋の風が花卉を奪うと、桜の香は主張し始め.....地面を見ると、ホッポホッと死人の手が伸び、終いには骨まで曝け出す『さあ、行こう』

short story208 「山神様—1」

狂った女を捜す為の山狩り。長者には、腹の子、跡継ぎを捨て置く訳には行かない。夫が夜盗に襲われ、無残な死に様を目の前に曝け出し、女は山へ……山神が言う『この女。貰い受けたなら腹の子は無事に里へ渡そうぞ』娘より、欲に絡まれた長者……

short story209 「私の白い薔薇」

白い薔薇は、何でも私の謂う通り。あの人が嫌いと言えば、あの人の胸に咲き命を散らす「この人は、紫の薔薇が咲いたわ」私は、邪魔者はすべて白薔薇に挙げたの。私の花園は薔薇で一杯。バルコニー立つと、毎夜、呻くように薔薇が謳うわ.....フツ.....

short story210 「醜悪な影。捕らえた獲物」

秋の夕暮れ時、空を見詰める。切なさに囚われた様に高い空を遠くまで見詰め、この世の己の位置を居場所を確認する。切なさが、捕らえた心を放そうとしないから視線が泳ぐ。視線に飛び込む醜悪な影。舌舐めずり……「クッ、獲物だ」豹変！

short story211 「空の心」

沈み行く空。空は美しく青く染まることも藍色に染まることも忘れました。すべては、人間のせいです。だから、気分次第で赤く染まったり緑に染まったり.....その下で暮らすものたちは？そう.....狂うものや、進化するもの。絶滅するもの.....ルカ.....

short story212 「闇に焦がれて……」

闇が、私に忍び寄る「あげないよ……」いつもの先手……『クスクス』……聞こえる「あたしの欲望が欲しいんでしょ？」『クスクス』……闇に焦がれるから……付入られる「もう……好きにしてもいいから」勝てない私は……『戴きます』流され、突き抜ける快感。

short story213 「幻想世界」

『.....酔わせることが、仕事ですから』重い口を開き妖魔が言う「そうね.....」当たり前
の答えを耳にして、ショックを隠せない私。妖魔が見せる幻想世界は余りにも私が望んだもので.....
依頼したのも私。観るのも私。このまま朽ち果てようか.....

short story214 「紅い闇の誘い」

微笑.....彼女の其れに僕は敵わない。紅い紅い闇の中、彼女は物憂げに佇み眼差しで僕を誘う。一步を踏み出すと.....もう止まる事は出来ない。彼女の餌として進む、また一步、彼女の指が僕を誘い.....「このままじゃいけないんだ」無駄な抵抗。

short story215 「蒼い闇の誘い」

微笑.....彼の其れに私は敵わない。蒼い蒼い闇の中、彼の佇まいは鮮やかで、私の奪われた視線は外す事が出来ない。彼が優美に手を返し指先で招く。私の体は抵抗を忘れた様に勝手に動く。もう彼の罠の中「や.....」震える声で言う。無駄な抵抗。

short story216 「女の後ろ姿を見る」

ツツと、宵闇に響く女のすすり泣く声「ああ、何時ものルカ」石造りの橋は文化財に指定され作り変える事も出来なかった。皆、よもや洪水で壊れ流される橋など想像しなかった。子供が流され助けに飛び込み自らも死.....女の後ろ姿を見る。

short story217 「親子幽霊」

『みてみてママ』にこにこと砂糖菓子のような笑顔で娘が言う。娘が指差す方向を見ると、雲が……『ママ、うさぎさん』『そうね』笑顔で返す。公園からの帰り道、交通事故に遭った…
…『ママ、死んじゃったんだよね？葉子ちゃんと遊べないね』

short story218 「じいちゃんの鈴の音」

「じいちゃんの好きな……酒……持って来たぞ」「兄さん……」弟が嚙み締めるような……そんな、辛い泣き方で泣く。俺達のじいちゃんが逝った「兄さん……鈴の音、聞こえない？」「あ……ああ」涙が溢れる『死んだら鳴らす』じいちゃんの鈴の音。

short story219 「美しい虹そしてオーロラ」

空に美しい虹を見た。見詰めていると、グニャグニャと曲がりオーロラへと変わった。動けない！目が放せない！更にオーロラは上下に裂ける様に動き始め……声がした『見るな人間』ドクッ!心臓が打った刹那！色を失ったオーロラに喰われた。

short story220 「視界の選択」

血に染まってからの左眼は、世界を赤く見せる。視界は人間の物とはとても思えず……左眼、右眼と片眼で見る世界も違う。人間として生きるなら右眼のみに視界を任せるか……迷いは左眼と共に魔性を呼び、右眼の人間の理性が顔を歪ませる。さて……

short story221 「死しても思惑」

『死にたいの』「君はもう死んでるよ」『そうね、でも、もう一度、死にたいの』目の前に居る幽霊は言う「まさか、俺を道連れに？」『まさか』ケケラと笑われた『死に方が、気に入らない』自殺した妹と奇妙な日々が続く『そうね……後、復讐』

short story222 「取り合えず友達？」

獣の血を取り入れた魔が、人の血を取り入れ.....望みは何なのか.....新たな思考を持つ種でも創りたい？魔が言う『辛いんだ.....欲望を発する時にはどこまでも限りが無い程に進める。ただ.....』魔の言葉が止まる『取り合えず友達になろう』 「え？」

short story223 「妻の庭」

妻が残した庭.....今は、私が手入れをする。夜明け前の一瞬、妖精と見紛う透けた少女が蝶の様に舞う。朝日が昇る頃には、少女は消える。消える前にと少女に近付く『ママ.....』そう言うと、少女は消えていった。妻の温もりを感じ、私も涙する。

short story224 「彼女の幽体離脱」

「さようなら」も言わずパリに旅立った君「彼女、事故死で、今でも犯人をあの場所で見張ってるんだって」なんて、君の彫刻は奇抜だから、君の世界の出来事だと思ってた「幽体離脱出来る様になったよ！」確かに君は居るけど.....僕は苦笑する。

short story225 「獲物」

闇に開眼した奴らが獲物。理性を保っている間は「まあ、見逃してやってもいい」だが、狂気を帯びて来るとそういう訳にも行かなくなる。私は見逃しても……依頼が来る「やれやれ……」 「私の鞭の餌食になりたいのね」ピッ! 「一匹目」

short story226 「ドレス作りが生き甲斐」

愛する君の為に、僕は、ドレスを作り続ける「いい加減にして！」君は怒るけれど……『これが僕の生き甲斐なんだ！』また、ドレスを作る「……早く成仏して！これじゃ結婚も出来ないわ」『じゃ……後、千枚作ったら、成仏しようかな？』……彼女の姿が無い。

short story227 「パラレルワールドー1」

パラレルワールドを自由に行き来するパスを手に入れた。携帯が鳴る「孝之？」「孝之は、俺だけど？」「だから俺」「もしかして……君もパスを手に入れたの？」「そういうこと」「そっち行くから、俺も移動宜しく！」「判った」冒険の始まり？

short story228 「大阪の？ペーパーナイフ」

『姉ちゃん』ペーパーナイフが喋り掛ける。私の趣味はナイフを集める事。あの輝きと柄の細工を見ただけで高揚する『こんな斬れそうな兄ちゃん達と一緒にやと、わい、怖いわ』『あ、貴方、19世紀のロンドンの物じゃ……』『大阪、長いねん』

short story229 「影は生きている？」

忍び寄る影に怯える毎日。影が生きている？とは知らなかった。意思を持ち動く逸れは、異様な気配と臭いを放ち……獲物を狙っているのか？「何をしようと言うんだ！」至る所に生まれる影達。為す術は無い。俺は自分が生き残る術を……否……

short story230 「あの月の様に……」

鹿威しが響く闇が染み渡る静寂の夜。見上げる空の月には、我が物にせんと黒い雲が龍がごとく月に纏わり付く。光が届かぬ庭で、私は私を抱き締め身震いをした。生ある者の気配……「あの月の様には、ならないわ」『フツ』……察した貴方の微笑……

short story231 「鏡の宴」

鴉が二匹……道案内をする。私が止まると左肩に鴉が止まり……爪が喰い込み肩から血が流れる。其れが厭で導かれるまま進む。鏡だらけの部屋に通される。燕尾姿の男が私の手を取り部屋の中央へと誘う『宴を御一緒に』鏡に映る数々の……

short story232 「妖魔の僕」

闇が歪む頃に揚羽を二頭放つ。彼女らの舞いを楽しみながら獲物を探す「居た……欲望に塗れ、己を制する事が出来ない人間」「狩り取る」狩られた人間は恍惚の表情を浮かべ倒れ込む「ほら」『クッ』私の飼い主の妖魔に獲物を渡す。

short story233 「206x年—1」

暁方に見る光景。悍ましい……魑魅魍魎が死肉を喰らう様。昔の人間は未来を夢見た言葉を残したが……この様を如何に見るのか。206x年。人間のSixth Senseに異変が起きた世界は変わった。今、地球上に共存するものは……

short story234「206x年—2」

206x年。人間達は己のSixth Senseの異変により想像もしなかった壁に突き当たる。霊魂の存在に始まり、魔や妖怪、天使や悪魔、神.....などを受け入れるよりも困難な己の存在。核となる魂、器となる肉と精神の制御に苦悩.....

short story235 「206x年—3」

206x年。人間は只生き只死に腐る。Sixth Senseに異変が無ければ、永遠に繰り返す事が出来たのに.....時間は寿命に容赦なく刻印を着け、寿命は魂、肉、精神を蝕む。何を得れば己が存在出来るのか.....哀れ人間が悩む滑稽な姿。

short story236 「206x年—4」

206x年。Sixth Senseに異変が起きた人間の死の様は、小説や映画などで想像をしたものが当たり前の様に起こり……目前で霧の様に人間が消え死んでも驚く者は時と共に少なくなった。だが、魂、肉、精神が別々に死ぬ様だけは……

short story237 「在りし日の残像」

私が妖魔に依頼したのは、在りし日の私達。過去から切り取られた私達は、幸福を纏う姿が輝き、それが当たり前に見えた。貴方が死んでしまった.....私は生きているのに.....「何故？」妖魔に問う「ねえ.....過去の.....彼は生きているの？」『残像ですよ』

short story238 「闇の住人」

闇の中.....光を切り取り作った道化師の人形を操る。人形は、次第に目覚め独りで踊り出す。私の空虚を見透かす様に.....ギャ!悲鳴を上げ人形は裂かれ.....『御戯れが過ぎます。過度の光との接触は御止め下さい』鴉が言う。闇の住人の遊び。

short story239 「魔神と俺—2」

『桔梗、裂け目は見付けたのか？』「ああ、耳鳴りにも似た音がする、この先だ。今回の獲物はやばいかも……」『俺様は誰だ？』「閻龍、聞き飽きたその台詞。隼人に後始末頼むよ」『クッ』「やれやれ」如何にも愉快地獲物を切り裂く。

short story240 「魔神と俺—3」

今回の獲物は、肉を持った妖魔だった『桔梗、ちょっと喰ってもいいか？』すでに息絶えた妖魔を闇の狭間から引き摺り血？濡れた手をペロリと舐めながら闇龍が言う「腹壊して、今夜の晩酌が無くなっても知らないよ」『紗枝の晩酌日かー』

short story241 「魔神と俺—4」

縁側にて、上弦の月を見ながら、祖母ちゃんと閻龍が酒を酌み交わす。俺は、そこそこ二人に料理を運ぶと座敷の隅に腰を下ろし晩酌を始める「桔梗、今日の獲物は薬屋が欲しがりましてね、結構な額でした」「隼人お疲れ。呑もうぜ」「ええ」

short story242 「寿命と鼓動」

人間の寿命に歪が出来た。歪は、半年で人生を全うする者から、千年で大往生を迎える者まで、様々出現させた。これでは平均というものが表せない！教育から年齢制限まで、見直される事になった。只、一生に打つ心臓の鼓動の数は皆同じだった。

short story243 「魔神と俺—5」

「閻龍！いい加減にしろよ、祖母ちゃんに振られるのはいつもの事だろ？いつまで獲物を引き摺って闇の狭間を歩くんだ？」『帰れよ……桔梗……』「隼人に連絡するよ」『……いい、この獲物は俺が喰うから……』人間より人間らしい魔神……俺は……

short story244 「魔神と俺—6」

「俺は帰る。隼人には報告だけして置く」『桔梗まで、俺を捨てるのか……俺、このまま、闇の狭間に捕まったら……』「……」「まったく、此処は閻龍の領域。あんたのものだよな？」『そうだ』『けど、桔梗に捨てられたら帰れない』「やれやれ……」

short story245 「魔神と俺—7」

「閻龍。どこまで歩くんだ？」『この闇の狭間の果て』「そうか……今日は付き合う。明日は、研究所も休みを入れてる」「まあ、明日の晩酌に、また、祖母ちゃんに告れよ」『いいのか？』『隼人に後始末させろ。肉屋と薬屋に高く売れるぞ』「オ」

short story246 「私のすべて私の姫へ—1」

「あの夕日が欲しいなあ」『あの夕日を貴女のものにしてしまったら……明日からこの街の夕日は無くなりますよ？』「そうね」『ええ』「じゃ、今日の沈むまでの夕日を部屋に飾って」『御意』夕日より……『貴女の方が美しい』「そう」

short story247 「私のすべて私の姫へ—2」

「人じゃない貴方は誰？」『そうですね、人間が言う天使や悪魔、そのような者ではありませんが.....善の存在でも悪の存在でもありません。強いて言えば.....原種にて超越した者』「そう」『私には貴女がすべてです』藍色の夜に抱かれ.....

short story248 「物書きのとある契約—1」

月明かりに酔う夜は、決まって女が酒を持ちやって来る「いい月よ」「そうだね」適当に拵えた肴と酒と……二人で縁側に腰を掛ける「今は、どんな話を書いているの?」「山神と北の泉の主の話……一つ目が語ってくれてるよ」「フッ、楽しみね」

short story249 「物書きのとある契約—2」

人ならぬ者との契約を、この女が果たしてくれ、私は物書きとして生きて行ける。月の半分を街から離れ、この山奥の日本家屋で独り暮らす「一つ目は千年以上生きているから、面白い話が聞けるでしょう？」「そうだね」この女も人では.....

short story250 「幽霊狩り—1」

「もう！嫌よ！！」「落ち着けよ！」「貴方は、冷酷な顔で狩れるでしょうけど……」「だ
けど！」「……けど、最近の幽霊は血を流すのよ？まるで人間だわ！」「きっと……狩られるの
が怖いよ！痛いよ！」ウッ……幽霊狩りを生業とする。

short story251 「幽霊狩り—2」

「パートナーが居なければこの仕事は出来ない。君も判っているはずだ」「ええ」「廃業した人間は、即刻、奴らに狙われる」「ええ」「肉体が果てるまで精神が枯れるまで……俺たちは遣れる」「狩れるはずだ!」「ええ」二人……抱き合う。

short story252 「律儀な幽霊」

「俺さ……見えるんだよ」「朝のラッシュ時に、自販機の横に女の幽霊が……」「はあ？」
しまった！つい酒の席で……「あ、それ、俺も俺も」友が言う「え？」「死んでも出勤してるんだよな～あの子。服も毎日違うし、律儀だよなあ」「！」

short story253 「絵巻の主—1」

見るなと言われると見たがり。触るなと言われると触りたくなる。それが人間だ！俺と弟は一族の禁を犯した。あの日から五千日……運命は決まる。人が見えぬものが見える俺達。すでに半病人の弟……あの古来よりの絵巻の主と成るか……死か……

short story254 「光る眼」

ピ!この部屋に越してから、夜になると電化製品のスイッチが勝手に入る。最近では、ピ!ピ!ピ!ピ!
°.....カッ.....スイッチが入る音の後に物音がする。ふと、夜中に目が覚め.....目を開けると.....
そこには光る眼があった.....キャアアア!!

short story255 「私と貴方の朱莉（あかり）」

『……泣かないで』 貴方には聞こえぬ声で言う『私は朱莉（あかり）を守る事が精一杯だった……』 貴方と私の子供、あの子がこの世にただ私に居るだけで私は幸せなの『誰も恨まないで』 泣かない……幽霊の私…… 「今日の涙は暖かいよ……君の涙かな？……」 『嗚呼……』

short story256 「来世への旅立ち」

「フツ」 「アハハ」酔いどれの二人は岬で抱き合い寄り添い、この世の最後を互いの身に刻む「何故、敵の家の産まれたの？」 「何故、敵の家に産まれたんだ？」 左の小指を絡ませて、赤い糸を絡ませて、抱き合い..... 「来世で」 「はい」 飛び立つ。

short story257 「噂の外灯」

何度修理しても点かなくなる噂の外灯。いつもなら気味の悪さに目を逸らしそそくさと通り過ぎるんだけど……「やっだ！また一点減してるー交換ね、ウフッ」酔っ払いは強し！『あら、お仲間？』身体から放電？する女に声を掛けられる。

short story258 「私の操り人形」

操り人形には糸が付いてる。ほら、貴方にも付けましょう……『フッ、これで私のお人形』……
素敵よ。貴方は……絵が好き？音楽が好き？それとも……死ぬまで踊るの私の為に……『ねえ、
何が御望み？』『まあいいわ、棚に飾りましょう』『フッ』

short story259 「Vampire—2（ハロウィン）」

仮面を付けても君だと判る『綺麗だ』そっと彼女に近付き細い腰に腕を回す……完璧だ。バチ!
!「この蚊は！性懲りも無くこんな所まで!」『君も化け物のパーティーに参加して……何かあったら……』「今日はハロウィンよ!」『ハロ……ん?』

short story260 「万屋（よろずや）—19（ハロウィン）」

10月31日『旦那、ハイカラな時代になりやしたねえ～公然と化け物が騒げる日が来るなんて、思いもしやせんでしたよお』「ああ、まあな！俺も、もう化けもんだ！」「にいちゃん……まだ、根に持ってるの？」「いいや……呑もう！既朔！」

short story261 「万屋（よろずや）—20（ハロウィン）」

ジジィが死に、十五夜が逝こうとした夜……「やだよ！にいちゃん！また……また……」ウ
ァァァァ！！既朔が狂った夜……『旦那あーいい月でさあ呑みましょ……』『ヒィィィッ!!!』月夜の晩
酌に釣られた妖怪が助けとなり——「にいちゃんか……」「何だよ」

short story262 「万屋（よろずや）—21（ハロウィン）」

「昔を思い出してな……」「よう！既朔！ハロウィンてなハイカラな祭り、親父も十六夜も知らないだろ？夜は長い。呼んでやれ」「にいちゃん、何言ってるの？」「今年は、親父も十六夜も米国じゃないか」「はあああ？」時代は……俺だけを残し……

short story263 「赤い月夜は爪を磨ぐ」

赤い月が空に昇り切る前に私は爪を磨く。こんな月の日に狩りをしないなんて馬鹿げている「フツ」獲物は、そうね……妖怪でも悪魔でも……人間でも。嗚呼、たまに人間を狩ってしまうのは、私の悪い癖だわ。でも、奴らが悪いわ、私に惑うから。

short story264 「青い月夜は牙を磨ぐ」

青い月が空に昇り切る前に僕は牙を磨ぐ。こんな月の日に狩りをしないなんて愚かな事だ「クッ」今日の獲物は……妖魔か天使か……ああ人間でも。そうだ、たまに人間を狩ってしまうのは、僕の悪い癖だ。だが、僕の誘いに乗る彼女達が悪い。

short story265 「私の闇のお城」

一握りの光を左手に進むの。私は、闇に囚われているけれど、闇が嫌いじゃない。只、少し、光が欲しいの.....闇の狭間を根城にして.....今宵の遊び。私の魂と肉の心配をたまにするの。ベッドで大人しくしてるかってね「ウフッ」遊び相手...見付けた。

short story266 「魔の為の演奏会」

狂った音楽家の回収が俺の役目。他の仕事もあるのに……「たまには、俺以外の要員をお願いします」「何？狂った音を普通の人間が聞けるとでも？」「俺だって普通……」「さっさと行く！」「御意」回収された音楽家は魔の為に演奏を繰り返す。

short story267 「ドレスの再生」

赤いドレスを引き裂いて、白いドレスを引き裂いて、青いドレスを……悲痛な叫びが聴こえる「毎回、壮絶だね」「仕方ないわ、ドレス宿った念を成仏させるのが、私の仕事だもの」「そうだけど」「さあ、後は再生させるわよ」ドレスを手にする。

short story268 「姉さん椿（あねさんつばき） —3」

『ねえ、そこの坊や？あちきの姿が見えるのかえ』それは、目に鮮やかな紅色の椿の側に立つ鮮やかな女性「あ、あの……」『ほお、見えるみたいじゃねえ』『どうだえーぬしにあちき取り憑くいうんわ』俺は言葉が出ない「！」『フフッ』

short story269 「君へ.....鎮魂歌を捧ぐ—1」

鎮魂歌を高々と掲げ、君の墓を暴きに行く。俺は信じない！君がこの世から居なくなる事を...
...ガクガク.....「ほら、君は此処に居る」君は、何年立っても変わらない姿だから.....俺は毎日、
君の墓を暴く「俺は年を取ったよ」迎えを待つ日々.....

short story270 「地球最後の日」

地球最後の日。私と貴方はこの地球に残り、人類の滅亡を見届ける「何故、貴方は残ったの？」「君が居るから」資源は人間に蝕まれ.....人間という種が生存出来なくなり.....人類は地球を捨てた。否.....捨てられたのかもしれない。放浪が始まる。

short story271 「まさか！—1」

夜の街をふらふらと徘徊する「酔っちまった！ん？何だ、また此処か……」酒に呑まれると、決まって来る路地裏「行き止まりか……案外、この壁を押せば、地下に続く階段なんか現われたりしてな！あははっ！」「おっと」よろけた拍子に……まさか！

short story272 「まさか！—2」

心霊スポットに友達と行った帰り道「やっぱ、車がエンコなんてさ、流石、心霊スポットだよな！」「なんかなきゃな！」笑いながら帰る道……「あれ？Aが居ないぞ」『居るよ』Aがニヤと笑う「今度はBかよ」『居るよ』Bがニヤ……まさか！

short story273 「君と成仏したい？」

「君と成仏したい！結婚してくれ！」「え？」我ながら、情けないプロポーズだった。心霊好きな彼女「出直して来る」カフェからトボトボと帰る道。事故に合い……成仏しきれない俺は、彼女の元に……「え？嘘！結婚して！」『俺……もう死んでる』

short story274 「四姉妹骨董屋—1」

玄関を開けると……そこには、一匹の灰色の猫が居た。大きな目をパチパチとさせ……ている様に、見えた「置物？誰が？」猫の置物を抱き上げると、カードが落ちた。それには冬子とあり「何だ、姉さんか」——物音がして夜中目覚めると、そこには……ニャー……

short story275 「四姉妹骨董屋—2」

物音がして夜中目覚めると、そこには……人影が「きゃ……て、ちょっと！その頭に着いてる耳は？」『え？怖がらないんですか？』『冬子姉が寄越した物で、いちいち怖がれるもんですか！あんた、昨日の猫の置物よね？』『はあ……』しがない骨董屋の私。

short story276 「四姉妹骨董屋—3」

「冬子姉！また曰く憑きの品物よね？店に出していいのかしら？」「夏子！屋敷に置いてやって！」「まったく」「だって、その洋館には、貴女しかいないじゃない。皆を追い出して……」
「人聞き悪いわね！怖くて出て行ったのは誰？」「ウツ」

short story277 「四姉妹骨董屋—4」

「まあいいわ。冬子姉、今回のヨーロッパはどう？いい品はあったの？」「勿論」「はあ、しがない骨董屋家業よね？これも姉さんのせいよ」「また、その話？」「ふふっ」「灰色の猫ちゃんは躡けて置くから、また、遊びにいらっしやい」「ええ」

short story278 「魂人形師（こんにんぎょうし）—1」

人形に魂を入れる事が生業。ある夫婦の依頼。亡くした子供の魂を人形に入れ触れ合う。人形が言う「僕、心残りがあるんだ。叶うかな？」夫婦は喜び……子供は、次々と人形を乗り換え、子供から老人へ「ありがとう」夫婦には空虚が残った。

short story279 「魂人形師（こんにんぎょうし）—2」

人形に魂を入れる事が生業。婚約者を亡くした女の依頼。70センチ位の人形を大事に抱え……それに魂を入れた。儚げな微笑みを残し去る。——ある日、私に遺産相続の話が……女が死に、傍らに婚約者の魂を入れた人形が……「彼女をあの人形の中に」

short story280 「蝶使い—1」

白い蝶を飛ばし辺りを見回す。もう……遅いかもしれない。蝶は、真っ赤に染まり私の元へと帰って来た「惨劇の後か……」別に悲劇が起ころうと、助けるのが私の役目じゃない、只……再び蝶達を放し「惨劇を吸い尽くしておいで」せめて安らかに。

short story281 「その名は妖刀夜桜—1」

ゆらり……物の怪が動く。時が勝敗を告げるかの様に流れ出し「物の怪。僕から逃れるか？僕の餌食になるか？」ゆらり……きっと最後の力だろう。物の怪が体を大きくし、僕に襲い掛かる「この刃の糧と成れ」妖刀にて斬る「これで寂しくない」

short story282 「不老を望んだ男」

「何を考えていたんだ！俺は……」魔の者との契約を果たした。奴の望む仕事と引き換えに、願いを叶えた。俺は不老を望んだ！俺は充実している！時間が足りないんだ！だから……俺の目の前では、老いが、当たり前のように撒き散らされ……死が遠い……

short story283 「灯かり」

灯かりをひとつ。灯かりをふたつ。人の街の灯かりを消して行く『人間は気付かない、アハ』こんなにも、闇が大口を開けて迫っているのに！『ククッ』『そうだ！人間の灯かりも消そう。魂の灯かりも消そう』『楽しいな楽しいな』

short story284「酒に呑まれて男と女」

酔いどれの男と女。お池に嵌ってあけっなく溺死。気付きゃしない死んでる事を。街では人が大騒ぎ。やれあの夫婦はやっぱりな！やれ子供はどうする？気付きゃしない男と女。お手手繋いでお池を散歩。さて、三途の川に辿り着くやら？

short story285 「欲に塗れて魔窟へようこそ」

あっちは一つ目こっちは三つ目。あっちは刀こっちは槍。前は火で後ろは水で。さあ、どこへ行こうか？「此処は地獄か……」『否』『魔窟へようこそ』『さあ、貴方の望みを叶えましょう』『今、見え感じるのは、貴方の心』『如何致しましょう』

short story286 「魔界セラピスト—2」

「限界だ……」『仕方ありませんね』「頼む。奴らの音を！」『依頼なら、御請け致しますが？』ピアニストの依頼。彼の限界は20本の指で弾くソナタだった。恐怖に歪む表情で死…
…『言ったでしょ？人間の脳には、12本で弾く音が限界だと……』

short story287 「不老不死の少女—6」

「人間は、終末論が好きね。寿命が在る者の特徴のひとつかしら？」少女が言う「そういうものなのかな？」「フッ」「今日は、機嫌が良いね」「寿命が無い者には発想出来ないものだから、面白いわ」「ねえ、何か話して？そう……終末論」

short story288 「炎」

人間の手に渡った炎は全てを焼き尽くす。だが本来の炎の意味は違う……暖を取る。浄化する。そして、生み出す。その意味を知る我らが守りし炎。この時代において、変化を見せ始めた。逝ってしまえば我等が滅亡。変化を越えたのなら幕開け。

short story289 「月が蕩けた日」

月が蕩け落ちた日。一部のロマンチストとエゴイストが、人と人ならぬ者問わず、落胆し死を考えた夜。小さな妖精の悪戯と判り、醒めた夢の様に月は空へ帰る。一人が、甘美な笑みを浮かべ祝いの酒を掲げると、宴の始まり『小さな妖精と月に乾杯』

short story290 「お助け妖怪」

ト「来た！」トト「今日は二日目」俺の所にもお助け妖怪が来た。ノックの数により、妖怪が叶えてくれる事柄は違うと言う「七回目！ドアを開け……」『ラッキーセブンや！旦那、ラッキーやな！当分、世話になりませ』「え？願いは……」

short story291 「地球に嫌われたもんだ」

地球に見捨てられた人類。地球の回復を見計らって帰還したものの.....大地に人間が降り立つと弾かれる。ポンポンと、まるで大地はトランポリンの様だ。ならばと、海へ降り立つと、海水も生き物も逃げてしまい、また弾かれる。嫌われたもんだ.....

short story292 「悪魔のオーケストラ」

「最高よ！タクトは魔法を紡ぎ、左手は世界を創造して……溢れるの」捲し立てる「彼の横顔……そう視線よ！酔わない女は居ないわ」「きっと……羽があるのよ！彼は！」俺は見た。黒い翼を……悪魔の指揮するオーケストラ……その魅力に逆らえない。

short story293 「闇の中に砂の城を……」

闇を見るの。此処には、砂のお城の様な小さなお城を飾って、左側は本棚を置きましょう。果ての無い闇では、高い高い本棚になりそうね「フツ」正面には暖炉を、闇を燃やし続けるの。闇に包まれる様に……此処の安息は誰にも渡さない。只……

short story294 「闇の暗黒街—1」

此処は暗黒街。しかし、人の世界の暗黒街じゃない。闇の暗黒街だ。此処のルールは、持ち込める光は一人一つ。ただこれだけ。人外の者に関わりがある者しか知らない街。俺はこの街に、人間の世界では無い匂いを感じ、人間の街の腐臭を感じた。

short story295 「闇の原種—1」

深遠の闇、闇、闇。深くとても深く。この闇が果て無く続く事を願う。我は原種にてこの闇に鎮座する者。月というものの噂を聞き、闇に穴を開けた。初めて見る月の輝き。眺めていると、生き物が墮ちて来た。人間と言う奴か？月と同じ髪と目.....

short story296 「新月を捉えて」

静寂の佇まいに目を細め、軽く瞬きをし空を見上げ新月を目に捉えたら踵を返し貴女を捕らえる。少し怯えながら貴女は次に起こる事を知っている『新月は捉えたか?』『ええ』私達は狩りに行く。私達は己の命を満たしに行く。始まり.....

short story297 「光と闇の混沌」

昼を夜に代え、光の住処を造ってやる。何故、光が暴走し始めたのか？昼の陽の輝きと共に在る事を拒む？否……光と闇は交わる事が無いと言うのに……互いが表と裏。この混沌に互いの居場所を捜し……まさか互いが……貪っているのか？我、苦悩す。

short story298 「墮天使の翼—1」

『翼を下さい』墮天使が言う「天に還りたいの？」私が問うと『いえ……あ……そうかもしれ
ません。貴女を連れて天に還りたいのです』「何故？」『地上は……』言葉が途切れ、彼は涙す
る『貴女と共に在りたい』抱き締めても彼の震えは止まらない。

short story299 「墮天使の翼—2」

『……片翼しかありません。地上に降りる為に売りました』 「ええ」 彼を抱き締める私にも...
...二人震え、二人抱き合い 「私には翼が無い。あげられないわ」 『はい』 「墮ちましょうか？
闇へ……此処よりは……」 『そうですね』 闇へ参りましょう。

short story300 「百鬼夜行（ひゃっきやぎょう）—3」

百鬼夜行の宴の馳走。北の主が振舞うは皆が喉を鳴らす人間の魂の踊り食い。ウイ!ウイヅ!宴は上気し色を増し……濁酒片手に『馳走は、目に保養。舌に嘉味』『のう、人間は、何故、二度死にたがるのじゃ……喰うてくれと……』北の主が語り出す。